

<会員の広場>

第7回 UEJ「大学開放研究会」の報告

NPO 法人全日本大学開放推進機構研究員 香川重遠

2017年2月18日に龍谷大学にて開催された第7回 UEJ「大学開放研究会」には、12名の大学教員や事務職の参加者があった。

1. 第一部、藤田公仁子氏の発表「地域の拠点としての大学づくりをめざして」

藤田氏の発表は、今回のジャーナルのレポート「地域の拠点としての大学づくりをめざして」に内容をあげているので、内容はそちらを照覧していただきたい。

現在取り組まれている、個人の様々な生涯学習歴をデータで共有化する「生涯学習プラットフォーム」の構築は、これからの個人の生涯学習の進展に大きな可能性をもたらすと期待できる。まず、自己の潜在的な学習ニーズやその学びを活かす場をデータによって可視化することで、生涯学習の次のステップを見出すことが容易になる。従来、わが国の生涯学習に軽視されてきたコーディネーターの役割や機能を担うものと期待できる。また、生涯学習で学んだことを活かす場を示すことで、地域の課題解決のプログラムとのマッチングが拡がり、個人の生涯学習を地方創成にも寄与する方向へと導くことも期待できる。

会場では、個人の生涯学習の情報をプラットフォームにどこまで記録すべきかという、思想信条の自由などによるプライベートの問題や、生涯学習の当事者である個人やそれを提供する公的団体を除いて、プラットフォームにアクセスし、情報を閲覧することができる権限をどこまで民間企業などに承認していくのか、などの問題も指摘された。

2. 第二部、共同討議

共同討議では、参加者から大学の公開講座への市民参加についての議題が提起された。近年では大学にも地域づくりへの貢献が強く期待されており、これからは高齢者層に限らない、幅広い市民参加が望まれてくるし、そうした市民参加がまた大学を活性化させる期待が抱ける。

従来、大学の公開講座は社会人向けであり、定年退職した高齢者が主な受講者そうであったが、市民参加という観点から考えれば、地域の社会人や NPO 従事者など若年層も含まれて受講生の中に多様性が生まれてこなければならない。しかし、公開講座の現状を見ると、やはり高齢者層がほとんどであって、なかなか受講生の多様性が生まれてきているとはいえないように感じられる。会場からは、これまでの公開講座＝退職した高齢者向け、という大学側の考え方の固定性があるのではないか。その意味では、広報などを工夫したり、公開講座の趣旨などにも幅広い市民参加を望んでいる旨を明白にして行く必要性もあるのでは、などの意見もあった。

大学が地域づくりを進めていくには、地域の市民との協働は不可欠な条件であり、大学における市民参加はこれからの大学開放において重要な位置づけとなる。大学の運営のみならず、学生への影響力も期待され、市民参加を促進するための戦略が強化されていく必要があると思われる。